様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　７ 月　１ 日現在

機関番号：３２６１８
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2019
課題番号：１５Ｋ０２５７５

研究課題名（和文）近代日本語のテンス・アスペクト・モダリティ体系の変遷に関する統語論的研究

研究課題名（英文）A syntactic analysis of changes in the tense-aspect-modality system of modern Japanese

研究代表者
福嶋　健伸（FUKUSHIMA, Takenobu）

実践女子大学・文学部・教授

研究者番号：２０３７２９３０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,500,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究課題は、「近代日本語のテンス・アスペクト・モダリティ体系の変遷に関する統語論的研究」である。本研究の最も大きな研究成果を、端的かつ簡単な表現で示すと次のことを指摘した点にある。
「従属節と主節の区別がよりはっきりするようになったという統語的な変化が日本語にあったのではないか」
　つまり、かつては、従属節と主節の差が小さく、「文」という単位よりも「節」という単位で言語が使用されていたのが、現代日本語に近づくにつれ、主節の従属節に対する支配が強くなり、「文」という単位で言語が使用されるようになってきた、ということである。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　学術的な意義は、「研究成果」のところで述べることとし、ここでは社会的な意義について述べたい。本研究成果の一部が国語教育に応用できるという点が、最も、社会的意義として大きいと思われる。期間延長を申請したのもそのためである。具体的には、古典の助動詞「む」「むず」の教授法について貢献できると思われ、その成果は既に、第136回全国大学国語教育学会（茨城大会、2019年6月1日）にて、「古典文法の授業はなぜ苦痛なのか ―古典文法書の「む」「むず」の調査から原因療法を探る―」という題目で発表している。

研究成果の概要（英文）：The title of this study is ‘A syntactic analysis of changes in the tense-aspect-modality system of modern Japanese.’ The main research results are as follows.
　1:Compared with old Japanese, contemporary Japanese has a big difference between the main clause and the subordinate clause.　2:In other words,compared with old Japanese, contemporary Japanese values sentence rather than clause.

研究分野：日本語学

キーワード：テンス（tense）　アスペクト（aspect）　モダリティ（modality）　丁寧語　候ふ　統語的変化　主節　従属節

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１．研究開始当初の背景

詳細は申請書で述べた通りであるが、国外の研究動向について述べると、主に欧米諸語においてテンス・アスペクト・モダリティ体系の変遷を明らかにする研究が盛んであり、大きな成果が挙がっていた。しかし、アジア諸語では研究が遅れており、特に日本国内の近代語においては、当該体系の変遷に関する研究は、事実上、皆無であった。テンス・アスペクト・モダリティ体系自体が認められていると言いがたい状況であったのである。国際的レベルから見ても、日本のこの状況は大幅に遅れており、早急に研究を進める必要があった。

そこで、本研究課題の研究代表者は、これまで、計 5 回の科学研究費の交付を受け、主に、形態論・意味論の観点から研究を進め、近代日本語のテンス・アスペクト・モダリティ体系の変遷を、言語類型論的に明らかにしてきた。

本研究課題では、その最終段階として、当該体系の変遷のあり方を統語論的観点から考察する。その上で、形態論・意味論・統語論を踏まえ、研究を総括することとした。なお、本研究は、国内の動向を踏まえると「当該体系の変遷を、統語論の観点から考察する初めての研究」として位置づけられる。

これが研究開始当初の背景である。

２．研究の目的

本研究の目的は、近代語のテンス・アスペクト・モダリティ体系の変遷を、統語的に分析することである。ここでいう、テンス・アスペクト・モダリティ体系とは、～タ、～テイル、動詞基本形（助動詞等の接続していない形、はだかの形、φとも表記することがある）、～ウ・～ウズ（ル）（及び、～ウ・～ウズ（ル）の後継の形式）で形成される体系のことである。

2020 年 5 月現在、～タ、～テイル、動詞基本形、～ウ・～ウズ（ル）で構成される体系を、テンス・アスペクト・モダリティ体系と見なすことは、学界の水準から考えて、概ね同意が得られていると思う。しかし、本研究開始当初では、「～ウ・～ウズ（ル）、動詞基本形、～テイル」の三者間に「体系」を見出す意義は認められない」というのが、学界（学会）の支配的な立場であって、この点、国外の状況と比較しても、研究水準も極めて低いと言わざるを得ない状態であった。このような研究水準の引き上げも、本研究の目的の一つであったといえる。

３．研究の方法

研究方法について、本研究の特長と思われる点の一つを、以下で、分かりやすく述べたい。

テンス・アスペクト・モダリティ体系の変遷を統語的に分析する際に、テンス・アスペクト・モダリティ体系だけを分析していたのでは、どうしても循環論になってしまう。もちろん、誤解のないように述べるが、テンス・アスペクト・モダリティ体系の変遷だけでも、統語的変化をうかがわせる現象は十分になる。例えば、次の例のように、～ム・～ムズ、～ウ・～ウズ（ル）は、連体節内に問題無く生起する。

（例 1）（注：俊寛達は）平家<u>滅ぼさんずる</u>はかりことをぞ廻らしける。（『平家物語』）
（例 2）　この学者を<u>殺さう</u>ことは本意無い（『天草版伊曽保物語』）

（例 1）は～ムズの例、（例 2）は～ウの例である。現代日本語で考えた場合、「平家を滅ぼそうはかりごと」「平家を滅ぼすだろうはかりごと」や、「この学者を殺そうこと」等は不自然であろう。現代日本語においては、～ウや～ダロウ等のモダリティ形式が生起するのは、主として、主節である。よって、（例 1）（例 2）の存在は、かつては、主節と従属節との差が小さかったという事実に符合する現象といえる。本研究のポイントの一つは、このようなモダリティ形式の変遷と、～テイルというアスペクト形式の台頭が、軌を一にしているということなのだが、このような形式群（テンス・アスペクト・モダリティ体系に所属する形式群）の調査以外にも、具体的数値で検討できる現象が必要である。

そこで、本研究が主として注目したのが、丁寧語である。次の例を見てもらいたい。

（例 3）　思いがけなく伽藍(がらん)滅亡に至った事、仕方のない次第<u>です</u>。
（例 4）　思いがけなく伽藍滅亡に至り<u>まし</u>た事、仕方のない次第<u>です</u>。

上記（例 3）は、主節末のみに丁寧語がある例、（例 4）は従属節と主節の両方に丁寧語がある例である。現代日本語の場合、主節末に丁寧語が出現していれば、従属節中に出現していなくても、問題ない。先行研究の成果により、主節末の「丁寧さ」が従属節に影響していること、分かりやすくいえば、主節の支配が従属節に及んでいることが明らかになっている。

しかし、一方、この逆のパターン、つまり、従属節中に丁寧語が生起しているにもかかわらず主節に丁寧語が生起していないパターンについては、研究がほとんどなく、詳細は不明なままで

あった。これは、「従属節中に丁寧語が生起しているにもかかわらず主節に丁寧語が生起していないパターン」は、現代日本語としては、不自然なのか当たり前なので、研究対象になりにくかったためと思われる。次の例は、従属節の中のみに丁寧語が出現しているパターンだが、確かに、不自然である。なお、次例冒頭の「??」は言語学の論文で不自然であることを示す記号である。

（例 5）?? 思いがけなく伽藍滅亡に至りました事、仕方のない次第だ。

しかし、かつての日本語における丁寧語はどうだったのだろうか。本研究の成果により明らかになったことだが、実は、中世前期日本語の丁寧語である「候ふ」には、上記（例 5）のようなパターンが一定の割合で存在する。つまり、「従属節中に丁寧語が生起しているにもかかわらず主節に丁寧語が生起していない」という現代日本語に存在しないパターンが、かつての日本語には、存在していたということになる。

（例 6） [源頼朝に対する平重衡の台詞である。南都焼討を弁明している。]「衆徒の悪行をしづめんが為にまかりむか（ッ）て候し程に、不慮に伽藍滅亡に及候し事、
力及ばぬ次第也。昔は源平左右に（略）」 （『平家物語』）

この例では、「候し程に、」と丁寧語の「候ふ」が従属節中に生起しているが、主節は「力及ばぬ次第也。」となっており、丁寧語が全く存在しない。
また、次の『宇治拾遺物語』の例も興味深い。宇多院の質問に対する源融の返事である。

（例 7） 「爰(ここ)の主に候翁也」と申す。 （『宇治拾遺物語』）

当該部分の現代語訳（新編日本古典文学全集の訳）は、「ここの主の翁でございます」というものであり、現代日本語の感覚では、従属節には丁寧語がなくてもよいが、主節にはないと奇妙である。しかし、『宇治拾遺物語』の例では、全く逆になっており、従属節に丁寧語があり、主節に丁寧語がないのである。
このようなパターンがあるということは、主節の従属節への支配が、現代日本語のよりも弱かったことの反映であるといえる。

４．研究成果

4.1 研究の主な成果

[論文：近代語のテンス・アスペクト・モダリティ体系の変遷と、日本語の統語的変化の関係について、学会誌で指摘したもの]（査読付き）

福嶋健伸（2018）「新しい学説はどのように古典文法教育に貢献するのか ― ～ム・～ムズの違和感を言語類型の変化とテンス・アスペクト・モダリティ体系の変遷から説明する―」日本語文法学会学会誌『日本語文法』18-2，pp.11-27.
※本稿は以下の学会シンポジウム招待講演をもとにした論文である。

[学会発表：本研究の成果を国語教育に応用したもの]

福嶋健伸（2019）「古典文法の授業はなぜ苦痛なのか―古典文法書の「む」「むず」の調査から原因療法を探る―」第 136 回全国大学国語教育学会（日時：2019 年 6 月 1 日、場所：茨城大学 水戸キャンパス）
※本発表をもとにした論文を、2020 年度中に、学術雑誌『実践国文学』に投稿予定である。

[学会シンポジウム招待講演：近代語のテンス・アスペクト・モダリティ体系の変遷と、日本語の統語的変化の関係について、学会誌で指摘したもの]（招待講演）

福嶋健伸（2017）「新しい学説はどのように古典文法教育に貢献するのか―～ム・～ムズの違和感をテンス・アスペクト・モダリティ体系の変遷から説明する―」日本語文法学会第 18 回大会シンポジウム『日本語文法研究と教育との接点』（日時：2017 年 12 月 2 日、場所：筑波大学 筑波キャンパス）

4.2　得られた成果の位置づけとインパクト

本研究は、「テンス・アスペクト・モダリティ体系の変遷」を統語的な観点から分析した初めての研究として位置づけられる。「研究の目的」でも述べた通り、本研究開始当初では、「～ウ・～ウズ（ル）、動詞基本形、～テイル」の三者間に「体系」を見出す意義は認められない」というのが、学界（学会）の支配的な立場であったわけだが、日本語文法学会第 18 回大会シンポジウムにて本研究の成果を発表したことで形勢が逆転し、日本語文法学会学会誌『日本語文法』に本研究成果が掲載されるにいたった。この点、少なからぬインパクトがあったと思う。

4.3　今後の展望

まず、古代語から近代語への流れをおさえる必要がある。また、古代語の資料として、どのようなものが活用できるのか、という点も考察する必要があると思う。古代語の場合、当時の資料として利用できるものが極めて限定されている。周知の通り、『源氏物語』をはじめとする中古和文資料も、後世の写本や版本であって、どこまで「当時の資料」といえるのか、難しいのである。このあたり、研究分野によっては、あまり明示的に議論されていないのだが、江戸時代の版本と同じような言語体系を、中古和文資料とみている可能性もあるといえる。この辺りのことは、今後、検討していく必要があるだろう。

4.4　当初予測していなかったこと

本研究の研究成果が、国語教育に応用できることがわかり、期間を延長して研究を進めた。その成果は、第 136 回全国大学国語教育学会（茨城大会、2019 年 6 月 1 日）にて、「古典文法の授業はなぜ苦痛なのか ―古典文法書の「む」「むず」の調査から原因療法を探る―」という題目で発表することができた。

以上

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 福嶋健伸
２．発表標題 古典文法の授業はなぜ苦痛なのか―古典文法書の「む」「むず」の調査から原因療法を探る―
３．学会等名 第136回全国大学国語教育学会（日時：2019年6月1日、場所：茨城大学 水戸キャンパス）
４．発表年 2019年

１．発表者名 福嶋健伸
２．発表標題 新しい学説はどのように古典文法教育に貢献するのか―～ム・～ムズの違和感をテンス・アスペクト・モダリティ体系の変遷から説明する―
３．学会等名 日本語文法学会（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 福嶋健伸
２．発表標題 中世前期日本語の「候ふ」について
３．学会等名 第14回現代日本語文法研究会
４．発表年 2018年

１．発表者名 福嶋健伸
２．発表標題 「候」の統語的分布について：現代日本語の「です」「ます」との異なり
３．学会等名 現代日本語文法研究会第13回大会
４．発表年 2016年

１．発表者名 福嶋健伸
２．発表標題 丁寧語が文中にはあるが文末にはない場合―中世前期日本語の「候ふ」と現代日本語の「です・ます」の統語的分布の異なり―
３．学会等名 日本語文法学会第16回大会
４．発表年 2015年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考